慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クメール語の結果を表す動詞に関する一考察
Sub Title	Verbs in resultative constructions in Khmer
Author	上田, 広美(Ueda, Hiromi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.149- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クメール語の結果を表す動詞に関する一考察

上　田　広　美

1．はじめに[1]

クメール語[2]の動詞[3]は一文中に連続して現れ、動詞間の意味的な関係を明示する接続詞の介在は必要とされない。このような複数動詞文について、上田・岡田（2017）[4]では、［V1＋V2］という2つの動詞句の連続を取り上げ、［V1］と［V2］の意味的な関係を、並列、結果、目的、様態に分類した。この4種類の連続のうち、［V2］が［V1］の結果を表す連続の例（1-2）を以下に示す。動詞間の意味的な関係としては、それぞれ、例（1）の［V2］/cɛh/＜知る＞は［V1］/riən/＜学ぶ＞の結果を、例（2）の［V2］/cʔəŋ/＜加熱される＞は［V1］/ʔaŋ/＜焼く＞の結果を表している。動作の主体については、例（1）では共有されているが、例（2）では共有されていない。即ち、例（2）では、/ʔaŋ/＜焼く＞の主体は/kɔət/＜彼＞であり、/cʔəŋ/＜焼ける＞の主体は［V1］の補語であった/məən/＜鶏＞である。

(1)　**riən**　**cɛh**[5]
　　学ぶ　知る
　　＜勉強して知識を身につけた[6]＞　(Bisang 2014:690)

(2)　kɔət　**ʔaŋ**　məən　**cʔəŋ**
　　3SG　焼く　鶏　焼ける
　　＜彼は鶏が焼ける（と二つに分けた）[7]＞　(NRK)

先行研究中では概ね、［V2］が［V1］の結果を表すこのような連続について、アジア諸語に見られる結果構文として記述されている。また、［V2］の

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第51号（2020）pp.149~172

位置に現れる一群の動詞の中に、特定の［V1］と対をなすものがあること、さらに、否定辞は［V2］に前置される、という2点の指摘も一致している。以下に、［V1］と［V2］が対をなす連続で［V2］が否定される例（3）を示す。この例（3）では、［V1］/sɔmraan/＜横になる＞[8]の結果を表す［V2］/lɔ̀k/＜眠る＞に否定辞/mɯn/を付加している。［V1］と［V2］は、動作の主体（/puok kɲom/＜私たち＞）を共有している。

(3) puok kɲom **sɔmraan**[9] mɯn **lɔ̀k** sɔh
PL 1SG 横になる NEG 眠る PTCL
＜私たちは全く眠れなかった＞ (CKK)

このような動詞の連続について、Haiman（2011:274-275）では、さらに、以下の例（4-5）を挙げ、［V2］の位置にあれば結果を表す動詞/lɯɯ/＜聞こえる＞（例4）が、［V1］の位置にあれば動作の試行を表す（例5）と述べている。

(4) **sdap** **lɯɯ**
聞く 聞こえる
＜聞こえた＞ (Haiman 2011:274)

(5) **lɯɯ** mɯn **dɔl**
聞こえる NEG 至る
＜聞こえなかった＞ (Haiman 2011:275)

本稿では、クメール語の動詞を下位分類する一助として、以上に挙げたような、結果を表すとされる一群の動詞の用法について整理する。対象としては、先行研究で、結果を表す動詞の中で、対をなすとされている動詞として挙げられているグループから、使用頻度[10]の高い視覚と聴覚にかかわる2語、すなわち、/khə̀əŋ/＜見える＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞の用例を収集し、出現環境を整理する。

クメール語の動詞は形態上の特徴によって分類することができない。本稿では、Huffman（1967:164-175）の「述語」の定義を応用し、否定辞/mɯn/[11]

を直接前置できる語[12]を動詞と考えることとする。動詞句の連続とみなす基準としては、上田・岡田（2017）で試みた分類方法を用いる。即ち、個々の動詞句の表す「事象」が標識を介在させずに連続して一連の「出来事」を表すと考え、これらの動詞が発話される際に休止が入らないことを基準とする。また、動詞句の間に補語や否定辞が介在し得るか否かという点も考慮する。

本稿の調査で用いる用例は文学作品を中心とした資料[13]から収集するが、可能な限り複数の作者による異なる年代の資料を扱うこととする。また、先行研究中の例文も含め、用例の解釈については、母語話者に対する調査[14]を行った。

２．先行研究

本章では、先行研究でどのような動詞が結果を表す動詞として挙げられているのか、それらの動詞がどのように分類されているか、また、動詞の連続内の位置による意味の違いについての記述を紹介する。

２．１．結果を表す動詞の種類

先行研究中で結果を表す動詞として挙げられているものは、概ね同じ動詞である。いずれの先行研究でも代表的な動詞を挙げるとしており、この種の動詞を網羅しているわけではない。先行研究の説明と、動詞の組み合わせを対照した表１では、最も多くの資料を参照して用例を収集しているKhin（1999）を基本として、それ以外の先行研究を対照する形をとった。

Khin（1999:309）では、結果を表す構文は、動作を表す動詞［V1］と結果を表す動詞［V2］の組み合わせであるとしている。そして、［V2］に現れる動詞を２種類に分類している。

まず、特定の動詞を［V1］とするものとして、/khèəŋ/＜見える＞、/dac/＜切れる＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/lɔ̀k/＜眠る＞、/cɔəp/＜くっつく＞、/cnɛ̀əh/＜勝つ＞を挙げている。

次に、他の動詞が［V1］である場合も使えるものとして、/kaət/＜生じる＞、/dəl/＜至る＞、/trəv/<当たる>、/təən/＜間に合う＞、/baan/＜得る＞、

/ruoc/＜逃げる＞を挙げている。さらに、いずれの動詞についても、否定辞は［V2］に前置されることを述べている。

上述の2つのグループのうち、本稿で対象とする動詞は第1のグループの動詞にあたるが、その例として、Khin（1999:309）は、下記の/dac/＜切れる＞の例（6）を挙げている。第2のグループの動詞の例としては、下記の/kaət/＜生じる＞の例（7）を挙げている。また、［V2］が否定される例（8）も挙げている。

(6) **mə̀əl** **dac**
見る　切れる
＜読める＞　Khin (1999:309)

(7) **niijèəj** **kaət**
話す　生じる
＜話せる＞　Khin (1999:309)

(8) kɔət **daə** mɯn **dəl** saalaa
3SG　歩く　NEG　至る　学校
＜彼は歩いたが学校につかなかった＞　Khin (1999:310)

Jacob（1968:118-120）では、動詞の連続において［V2］の位置に現れる主動詞（second position main verbs）があると述べ、これらの動詞を語彙的な意味によって3種類に分類している。

まず、2つの動詞が意味的に対比しており、［V1］が表す動作の結果や完結を表す［V2］の例として、/khə̀əŋ/＜見える＞、/mòt/＜切れる＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/cɛh/＜知る＞、/còok/＜濡れる＞、/phot/＜超える＞、/cak/＜刺す＞、/khoh/＜間違う＞を挙げている。また、この種類の連続では、［V2］に否定辞が付く用例が多いと述べ、例（9）を挙げている。

(9) lòok **smaan** mɯn **khoh**
2SG　推測する　NEG　間違う
＜あなたの推測は間違っていない＞　(Jacob 1968:119)

次に、同じく、結果や完結を表す動詞であるが、不特定のさまざまな動詞

が［V1］となり得る場合の動詞として、/baan/＜得る＞、/kaət/＜生じる＞、/ruoc/＜逃げる＞、/tɔən/＜間に合う＞を挙げている。

最後に、意味的には達成や完結の意味をもたないさまざまな語が［V2］の位置に現れる連続があるとしている。例として、以下の（10）を挙げている。しかし、この第3のグループについては結果を表す構文ではないので、本稿ではこれ以上扱わない。

(10) kruosaa kmae **ɲam** baaj mɯn **praə** cɔŋkəh tèe
家族 カンボジア 食べる 飯 NEG 使う 箸 PTCL
＜カンボジアの家庭では食事に箸は使わない＞ (Jacob 1968:119)

本稿で対象とする動詞にあたる第1のグループの動詞の例としてJacob（1968）は、下記の/cak/＜刺す＞の例（11）を挙げている。しかし、この動詞/cak/＜刺す＞は、Huffman（1967:173）では、［V1］の位置に現れるものであり、動作を表す動詞として扱われている（例12）。本稿で参照した先行研究中で、結果を表す動詞としてこの動詞/cak/＜刺す＞を挙げているのはJacob（1968）のみである。また、このJacob（1968）の例（11）は、本稿の調査では、不適格と判断された。

(11)* cao **kap** mcah ptɛ̀əh mɯn **cak**
泥棒 切る 主人 家 NEG 刺す
＜泥棒が家の主人に切りつけたが刺さらなかった＞ (Jacob 1968:302)

(12) **cak** **mòt**
刺す 切れる
＜刺して切れた＞ (Huffman 1967:173)

Huffman（1967:171-175）では、動作の完結や予期された結果や達成の可能性を表す動詞（completive verbs）を、2種類に分けている。

まず、結果との関連をもつ動作を表す特定の動詞を［V1］とする動詞（specific completive verbs）として、/lɔ̀k/＜眠る＞、/khə̀əɲ/＜見える＞、/tɔən/＜間に合う＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/phot/＜超える＞、/cɛh/＜知る＞、/thòm/＜匂う＞、

/mòt/＜切れる＞、/cɔəp/＜くっつく＞を挙げている。

次に、可能性や達成を表す一般的な動詞（general completive verbs）として、/baan/＜得る＞、/kaət/＜生じる＞、/ruoc/＜逃げる＞、/srac/＜終わる＞、/cɔp/＜終わる＞、/khaan/＜欠く＞を挙げている。

本稿で対象とする動詞にあたる、第1のグループの動詞の例としては、下記の/lɔ̀k/＜眠る＞の例（13）を挙げている。［V2］が否定される例（14）のような場合には、失敗したり、達成が不可能であったことを表すとしている。

(13) jòp məŋ kŋom **deek** **lɔ̀k** sapbaaj nah
昨夜 1SG 寝る 眠る 快い とても
＜私は昨夜とてもよく眠れた＞ (Huffman 1967:171)

(14) **deek** mɯn **lɔ̀k** sɔh
寝る NEG 眠る PTCL
＜全く眠れなかった＞ (Huffman 1967:171)

Bisang（2014:659-690）では、［V2］が［V1］の到達する結果を表す動詞について、中国語の同類の構文の動詞と比べると数が限定されているとしている。そして最も一般的な動詞として、/khɔ̀əŋ/＜見える＞、/tɔən/＜間に合う＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/cɛh/＜知る＞、/trəv/＜当たる＞、/khoh/＜間違う＞を挙げている。Bisang（2014:690）の例を次の例（1）に示す。

(15) **deŋ** **tɔən**
追う 間に合う
＜追いつく＞ (Bisang 2014:690)

Haiman（2011:271-275）は、結果を表す構文は、［V1］が表す動作の結果を［V2］が表す組み合わせであるとしている。そして、［V2］に現れる成就を表す動詞（success verbs）について、いずれも「成就した」もしくは「やり遂げた」と解釈できるとし、以下の動詞を挙げている。/baan/＜得る＞、/kaət/＜生じる＞、/phot/＜超える＞、/ruoc/＜逃げる＞、/ceŋ/＜出る＞、/tɔən/＜間に合う＞、/cnɛ̀əh/＜勝つ＞、/dəl/＜至る＞、/dac/＜切れる＞、/trəv/＜当

たる＞という動詞である。

また、［V1］と［V2］が対応する動詞としては、/màəl/＜見る＞と/khàəɲ/＜見える＞、/màəl/＜見る＞と/skɔəl/＜知る＞、/deek/＜寝る＞と/lɔ̀k/＜眠る＞、/sdap/＜聞く＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞の組み合わせがあるとして、以下の例（16）を挙げている。

(16) ʔae pʔoon tnuu deet **kèc** mɯn **phot** pii saamaaraʔphuum mòk
方 PSN 避ける NEG 超える から 前線
＜一方トヌーダエトは前線から逃げられなかった＞ (Haiman 2011:271)

Haiman（2019:355-356）でも、最も一般的に用いられる結果を表す動詞として、/baan/＜得る＞、/phot/＜超える＞、/ruoc/＜逃げる＞、/ceɲ/＜出る＞、/tɔən/＜間に合う＞、/trəv/＜当たる＞、/cnɛ̀əh/＜勝つ＞、/dəl/＜至る＞、/dac/＜切れる＞、/kaət/＜生じる＞を挙げている。

次の表1に、以上の先行研究で挙げられた例の中から、主な動詞の組み合わせを挙げる。Khin（1999）とJacob（1968）とHuffman（1967）については、①特定の［V1］と対になるもの、②［V1］としてさまざまな動詞が現れるもの、という2つのグループのいずれに分類されたのか、数字で示した。いずれの先行研究でも、動詞の対を網羅したわけではなく、代表的な例を挙げたものである。Jacob（1968）の第3のグループについては、前述の通り、結果を表す構文ではないことから、この表には記載しなかった。

表１：結果を表す動詞が［V2］にある例文中の［V1］（先行研究の対照）

［V2］	Khin(1999)	Jacob(1968)	Huffman (1967)	Haiman (2011, 2019)	Bisang (2014)
khàəɲ 見える	① rɔ̀ɔk 探す kɯt 考える màəl 見る	① rɔ̀ɔk 探す kɯt 考える nɯk 思う màəl 見る	① rɔ̀ɔk 探す kɯt 考える nɯk 思う màəl 見る	rɔ̀ɔk 探す màəl 見る	rɔ̀ɔk 探す nɯk 思う
cɛh 知る	① riən 学ぶ	① riən 学ぶ	① riən 学ぶ		riən 学ぶ

dac 切れる	① mə̀əl 見る lɔ̀k 売る				
lɯɯ 聞こえる	① sdap 聞く	① sdap 聞く	① sdap 聞く	sdap 聞く	sdap 聞く
lɔ̀k 眠る	① deek 寝る		① deek 寝る	deek 寝る	
cɔəp くっつく	① prɔəlɔəŋ 受験する		① prɔəlɔəŋ 受験する		
cnɛ̀əh 勝つ	① cbaŋ 戦う			beh もぐ[15]	
kaət 生じる	② niijèəj 話す daə 歩く	② tvəə kaa働く	② mɔ̀ɔk 来る	hoop 食べる clɔ̀h 争う	
dəl 至る	② daə 歩く kɯt 考える			dɔɔk dɔŋhaəm 呼吸する smaan 推測する	
trəv 当たる	② baɲ 撃つ	① smaan 推測する		smaan 推測する thaa 言う	smaan 推測する kɯt 考える
tɔən 間に合う	② kɯt 考える təv 行く		① təv 行く	kèc 避ける coh 降りる	deɲ 追う
baan 得る	② təv行く praə 使う	② təv 行く	② təv 行く	trɔəm 耐える	
ruoc 逃げる	② lə̀ək 持ち上げる rɔ̀t 逃げる	② təv 行く tvəə kaa 働く	② lə̀ək 持ち上げる mə̀əl 見る	lə̀ək 持ち上げる rɛ̀ɛk 担ぐ dɔɔk dɔŋhaəm 呼吸する	

phot 超える		① ciəh 避ける	① ciəh 避ける	kèc 避ける	
khoh 間違う		① kɯt 考える			kɯt 考える smaan 推測する
skɔəl 知る				mə̀əl 見る	
dəŋ 知る				smaan 推測する	
ceŋ 出る				saəc 笑う	

２．２．動詞連続の中での位置

1章に挙げたHaiman（2011:273-275）の例（4-5）については、Haiman（2019:355-356）でも、ひとつの動詞が、動作の試行と成就の両義性をもち、その動詞が結果を表すか否かは、動詞連続中の位置によって決まると述べている。以下の例では、/lɯɯ/＜聞こえる＞が、［V2］の位置にある例（4）では、結果を表し、［V1］の位置にある例（5）では動作の試行を表すとしている。

(4再掲)　**sdap**　**lɯɯ**
聞く　聞こえる
＜聞こえた＞　(Haiman 2011:274)

(5再掲)　**lɯɯ**　mɯn　**dɔl**
聞こえる　NEG　至る
＜聞こえない＞　(Haiman 2011:275)

しかし、Haiman（2011, 2019）は例文の出典を記載していないため、この例（5）の前後の文脈を確認できなかった。確かに、/lɯɯ/＜聞こえる＞のような結果を表すとされる一群の動詞のいずれかが［V1］の位置に現れる例文は存在するが、同じ［V1＋V2］の連続の例（17）では、/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V1］の位置にあっても、意図を示しているとは考えにくい。

(17) **lɯɯ** **dəl** mdaaj miiŋ kŋom
聞こえる 至る 叔母 1SG
＜（この知らせは、村にいた）叔母の耳に届いた＞ (NRK)

さらに、Haiman（2011:274）は、例（18）では、本来、動作の試行と成就のどちらの意味ももたない動詞/kmèən/＜ない＞が動詞連続の中の［V1］との意味的な関係によって、成就や完結の意味を表すとしている。

(18) viʔseeh **rɔ̀ɔk** **kmèən**
特別な 探す ない
＜特別で探しても存在しない＞ (Haiman 2011:274)

また、Haiman（2011:274）は/dəŋ/＜知る＞についても、本来、動作の試行もしくは中立の意味をもつが、連続中の出現位置により成就の意味をもつとしている。以下の例（19a-20）では、動詞/dəŋ/＜知る＞について、［V1］の位置にある例（19a）では動作の施行を表し、［V2］の位置にある例（20）では結果を表すとし、ひとつの動詞が出現環境によって異なる役割を果たすと述べている。しかし、本稿の調査では、（19a）は不適格であった。仮に、例（19b）のように動詞/dəŋ/ではなく、名詞/dɔɔŋ/＜回数＞であれば、「数えきれない」という意味になる。

(19a)* rɔəp **dəŋ** mɯn **cnɛ̀əh**
数える 知る NEG 勝つ
＜知りえない＞ (Haiman 2011:274)

(19b) **rɔəp** dɔɔŋ mɯn **cnɛ̀əh**
数える 回 NEG 勝つ
＜何度数えても数えきれない＞

(20) **smaan** mɯn **dəŋ**
推測する NEG 知る
＜推測できない＞ (Haiman 2011:274)

以上、本章では、先行研究中から、結果を表す動詞についての記述を紹介

した。先行研究中では共通して、結果を表す動詞として概ね同じ動詞を挙げており、大部分の先行研究では、表1に示した通り、①特定の［V1］と対になるもの、②［V1］としてさまざまな動詞が現れる一般的なもの、という2つのグループに分類していた。また、Haiman（2011, 2019）の述べた、出現する位置によって同じ動詞が動作の試行を表す場合と結果を表す場合があるという点については、根拠とされた例文について確認ができなかった。

３．/khàəɲ/ ＜見える＞の出現環境と意味用法

本章では、/khàəɲ/＜見える＞の用法を確認し、共起する動詞を整理する。2章の表1に示したように、先行研究中で特定の［V1］と対になる動詞として挙げられた例の中では、/khàəɲ/＜見える＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞が共通して代表的な例とされていた。3章と4章では、この2語の用例をもとに、結果を表す動詞の出現環境を整理する。

３．１．基本的用法

まず、/khàəɲ/＜見える＞の単独用法を確認する。以下の例（21）のように、視覚がとらえた対象を表す名詞句は、補語として動詞/khàəɲ/＜見える＞の後に置く。

(21) **khàəɲ** lòj pram riəl
見える 金 5 リエル
＜（道に落ちていた）5リエルの金を見た＞ (JSR)

また、以下の例（22-23）のように、理解したことを表すこともある。理解した内容を補文節で表す場合、補文標識の/thaa/が現れることがある。

(22) **khàəɲ** tèe
見える PTCL
＜わかったか？＞ (RPH)

(23) nih mak vèə **khàəɲ** thaa sɔmniəŋ cèə kmeeŋ lʔɔɔ haəj rɯɯ
これ 2SG 見える QUOT PSN COP 子 良い PRF Q
＜ソムニアンは良い子だと分かったでしょう？＞ (JSR)

３．２．［V1］の位置に来る動詞

本節では、/khàəɲ/が［V2］の位置にある連続[16]で、［V1］の位置に現れる動詞について述べる。

３．２．１．視覚を表す動詞[17]

［V1］の位置には、視覚を表す動詞として、先行研究で挙げられた/məəl/＜見る＞のほか、/sɔmləŋ/＜見つめる＞や/krɔɔleek/＜ちらっと見る＞という動詞が現れる。また、［V1］の補語が介在する/baək pnɛ̀ɛk/＜目を開ける＞や/bae mòk/＜顔を向ける＞といった動詞句も現れる。以下に例（24-27）を挙げる。

(24) ʔɔŋkaa dael **məəl** **khàəɲ** kɲom nàv pèel nih
組織 REL 見る 見える 1SG に 時 これ
＜この時私を見つけた革命組織（の人はポルだった）＞ (NRK)

(25) boʔrəj **krɔɔleek** **khàəɲ** rɔ̀ɔteh seh muoj baol
PSN 見る 見える 車 馬 1 走る
＜ボライが目をやると一台の馬車が走るのが見えた＞ (RPH)

(26) nèəŋ **baək** pnɛ̀ɛk **khàəɲ** nɛ̀ək nàv kbae
3SG 開ける 目 見える 人 いる そば
＜彼女が目をさまし彼がそばにいるのを見たら（機嫌が悪くなる）＞(RPH)

(27) nèərii nuh **ŋèək** cveeŋ sdam **khàəɲ** nɛ̀ək còmŋɯɯ deek lɔ̀k ʔɔh
3SG それ 向く 左 右 見える 人 病気 寝る 眠る 尽きる
＜彼女は、左右を見回して病人が寝てしまったのを見ると（こっそり薬を手渡した）＞ (RPH)

視覚を表す他の動詞と/məəl/＜見る＞が連続する例（28）もある。

(28) **sɔmləŋ** **məəl** tàv lɔ̀ə mèek **khàəɲ** pkaaj ploh
見つめる 見る 行く 上 空 見える 星 またたく
＜空を見上げると星がまたたくのが見えた＞ (PSP)

［V1］と［V2］の間には、否定辞が介在[18]可能である。視覚がとらえる対象を表わす補語は［V1］に後続する場合（例29）と［V2］に後続する場合

（例30）がある。

(29) **mə̀əl** ʔəj mɯn **khə̀əŋ**
見る 何 NEG 見える
＜何を見ようとしても何も見えなかった＞ (NKS)

(30) **mə̀əl** pòm **khə̀əŋ** ʔəvəj dael ...
見る NEG 見える 何 REL
＜（彼は、党が人民を苦しめている）何ごとも見えなかった＞ (NRK)

［V1］と［V2］の間には、否定辞や補語だけではなく、例（31）のように、修飾語も介在可能である。

(31) **mə̀əl** pii cɔmŋaaj **khə̀əŋ** tae pnɛ̀ɛk
見る から 遠さ 見える だけ 目
＜遠くから見ると目だけが光っていた＞ (NRK)

以上、/khə̀əŋ/＜見える＞が［V2］の位置にある連続で、視覚を表す動詞が［V1］として現れる例を挙げた。いずれの例でも、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されていた。

３．２．２．視覚以外の動詞

/khə̀əŋ/が［V2］の位置にある連続で、［V1］の位置に現れる動詞としては、表1に示した通り、先行研究で挙げられた/rɔ̀ɔk/＜探す＞（例32）や、思考にかかわる動詞/nɯk/＜思う＞（例33）が現れることが多いが、例（34）のようにそれ以外の動詞/ʔaan/＜読む＞が現れる例もある。

(32) tvə̀ə dooc mdac **rɔ̀ɔk** **khə̀əŋ**
する 同じ どう 探す 見える
＜どうしたら見つかるのか＞ (NRK)

(33) mae nə̀v tae **nɯk** **khə̀əŋ** koon
母 まだ 思う 見える 子
＜母は子を思い続けた＞ (NRK)

(34) nèəŋ baan **ʔaan** **khàəɲ** knoŋ siəvphàv muoj

3SG 得る 読む 見える 中 本 1

＜彼女がある本で読ん（でまだ心に残っている詩）＞ (PSP)

/rɔ̀ɔk/＜探す＞の場合にも、視覚を表す動詞との組み合わせと同じく、［V1］と［V2］の間に［V1］の補語や否定辞を介在させることができる。

(35) **rɔ̀ɔk** kɔnlaeŋ sapbaaj mɯn **khàəɲ** tèe

探す 場所 楽しい NEG 見える PTCL

＜楽しい場所は探しても見つからない＞ (RPH)

［V1］の位置で/rɔ̀ɔk/＜探す＞が、他の動詞と連続する例もある。とくに、先行研究中にあった思考を表す動詞との組み合わせが多い。

(36) **rɔ̀ɔk** **nɯk** cɔmlaəj mɯn **khàəɲ**

探す 思う 答え NEG 見える

＜（彼女は茫然として）答えが見つからなかった＞ (PSP)

思考を表す動詞が［V1］の場合、思考の内容は補文節として後続し、補文節の標識の/thaa/が現れることが多い。

(37) **jɔ̀l** **khàəɲ** thaa ...

理解する 見える QUOT

＜（娘がアンコールで失礼なことをした）とわかっていた＞ (PSP)

(38) **sɔŋkeet** **khəəɲ** thaa ...

観察する 見える QUOT

＜（森を行く人は速足で疲れ知らずだ）と観察してわかった＞ (PSP)

以上、/khàəɲ/＜見える＞が［V2］の位置にある連続で、思考を表す動詞などが［V1］として現れる例を挙げた。また、思考を表す動詞が［V1］の場合、思考の内容は補文節として/khàəɲ/＜見える＞に後続し、補文節の標識の/thaa/が現れることが多い。いずれの例でも、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されていた。

３．３．［V2］の位置に現われる動詞

本節では、/khàəɲ/＜見える＞が［V1］の位置にある文で、［V2］の位置に現れる動詞について述べる。

本稿の調査では、下記の例（39-40）のように、位置的には/khàəɲ/＜見える＞の後に他の動詞が続く用例は数多く見つかった。また、/khàəɲ/＜見える＞の後に続く動詞に否定辞がつく例もあった。

しかし、いずれの例でも、/khàəɲ/＜見える＞の前にも他の動詞があり、/khàəɲ/＜見える＞とそれに続く動詞の意味的な関係を考えると、「見る」という動作とその結果を表しているとは考えられなかった。また、下記の例でも、例（39）では/khàəɲ/＜見える＞と/riən/＜学ぶ＞の２つの動詞が表わす動作主体を共有するが、例（40）では動作の主体についても/khàəɲ/＜見える＞と/kdav/＜暑い＞では共有されない。従って、/khàəɲ/＜見える＞に後続する動詞は、視覚がとらえた対象や、思考した内容を表しており、前節で述べた補文節の標識/thaa/が現れない文だと考えられる。以下に例を挙げる。

(39) **srəəmaj** **khàəɲ** kluon **riən** ʔae prəətèeh krav
夢見る　見える　自ら　学ぶ　方　国　外
＜外国に留学したいという自分の夢は消えた＞ (PSP)

(40) miiŋ nuon **stèəp** tŋaah mèəldəj **khàəɲ** sac **kdav** cèə klaŋ
PSN　触れる　額　PSN　見える　肉　熱い　とても
＜ヌオンはミアルダイの額に触れて高い熱があるとわかった＞ (RPH)

以上、本章では、/khàəɲ/＜見える＞の出現環境と用法を整理した。/khàəɲ/＜見える＞が［V2］の位置にある連続では、いずれの例でも、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されている。また、一見/khàəɲ/＜見える＞が［V1］の位置にあるように見える用例は、補文の標識/thaa/が出現しない補文節であると考えられる。

４．/lɯɯ/ ＜聞こえる＞の出現環境と意味用法

本章では、/lɯɯ/＜聞こえる＞の用法を確認し、共起する動詞を整理する。

４．１．基本的用法

まず、/lɯɯ/＜聞こえる＞の単独用法を確認する。以下の例（41）のように聴覚がとらえた対象を表す名詞句は、補語として動詞/lɯɯ/＜聞こえる＞の後に置く。

また、Huffman（1967:173）は、動詞/sdap/＜聞く＞について、結果を表す/baan/を後続させると理解の意味を表すと述べているが、本稿の調査では、/lɯɯ/＜聞く＞についても同じく、以下の例（42）のように、理解したことを表す。

(41) **lɯɯ**　sɔmdəj　nih
聞こえる　言葉　これ
＜この言葉を聞いた＞　（JSR）

(42) **lɯɯ**　rɯɯ　tèe
聞こえる　Q　PTCL
＜わかったか？＞　（RPH）

/lɯɯ/＜聞こえる＞も、/khɜ̀ɜŋ/＜見える＞と同じく、聞いた内容を表す補文節の標識として/thaa/を用いることがある。以下に例（43）を示す。

(43) nɛ̀ɜk　treek ʔɔɔ　**lɯɯ**　thaa　...
2SG　喜ぶ　聞こえる　QUOT
＜（母が無事だ）と聞いてとても喜んだ＞　（RPH）

４．２．［V1］の位置に現れる動詞

本節では、/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V2］の位置にある連続で、［V1］の位置に現れる動詞について述べる。

４．２．１．動作主を共有する場合

動詞/sdap/＜聞く＞は、いずれの先行研究でも/lɯɯ/＜聞こえる＞に対して［V1］の位置に現れ対となる動詞として挙げられていた。しかし、本稿の調査で収集した用例中では、4. 2. 2に示す型の用例の方が多かった。

(44) saccaa **sdap** **lɯɯ** kaa sɔntèəʔnèə nih

PSN 聞く 聞こえる NOM 会話する これ

＜サッチャーはこの会話を聞いて（不快になった）＞ (CKK)

/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V2］の位置にある連続でも、動詞の間に否定辞を介在させることができる。

(45) trɔɔciək nèəŋ həŋ **sdap** mɯn səv **lɯɯ**

耳 3SG 耳鳴りがする 聞く NEG あまり 聞こえる

＜彼女は耳鳴りがして、あまり聞こえなかった＞ (RPH)

上述のいずれの例でも、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されている。動詞/sdap/＜聞こえる＞以外の動詞で動作の主体を共有する用例は見つからなかった[19]。

４．２．２．動作主を共有しない場合

/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V2］の位置にある連続では、［V1］の位置に現れる動詞として、「話す」、「鳴く」など「なんらかの音をたてる」という意味の動詞が現れることが多かった。このような例では、音をたてる主体と、その音を聞く主体は別であり、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されない[20]。

本稿の調査で収集した用例中では、［V1］の位置に現れる動詞として、最も頻度が高い動詞は、/lɔən/＜音をたてる＞であった。一例を挙げると、調査資料のひとつ（NRK）では、/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V2］に位置する用例中、［V1］として/lɔən/は最も多い13例があり、その他の［V1］は、/luu/＜吠える＞が1例、/niijèəj/＜話す＞が1例だった[21]。

まず、音をたてる主体が人である例（46-47）を挙げる。4. 2. 1で述べた基本的用法では聞こえた内容を表す名詞句は補語として/lɯɯ/＜聞こえる＞に後続したが、例（47）のように［V1］の主語の位置に現れることもある。

(46) mae **niijèəj** lɛ̀ɛŋ **lɯɯ**
母 話す NEG 聞こえる
＜母がしゃべってももう聞こえなかった＞ （NRK）

(47) pèək sɔɔsaə boʔrəj **lɔən** **lɯɯ** pii bəjdaa nɯŋ mdaaj thom
言葉 褒める PSN 音をたてる 聞こえる から 父 と 伯母
＜ボライをほめる言葉が父と伯母から聞こえた＞ (RPH)

4. 2. 1で示した動作の主体を共有する連続は/lɯɯ/＜聞こえる＞で文を終わらせることができた。しかし、4. 2. 2の連続の例では、/lɯɯ/＜聞こえる＞は否定されているか、もしくは、重複されているか、あるいは、擬音語や程度を示す副詞など何らかの修飾語句を伴ってどのように聞こえているのかが示されている。例（49）の/lɯɯ/＜聞こえる＞は重複されているが、これを単独で使用することはできない。

(48) kom **mɔət** **lɯɯ** pèek
PROH しゃべる 聞こえる すぎる
＜あまり大声でしゃべるな＞ (RPH)

(49) kèe **pòol** **lɯɯ** lɯɯ
3SG 話す 聞こえる 聞こえる
＜大声で話す＞ (RPH)

また、音をたてる主体が動物や非生物の例（50-51）であっても、/lɯɯ/＜聞こえる＞には、擬音語や程度を示す副詞など何らかの修飾語句が後続し、どのように聞こえているのかが示されている。

(50) mɔən **rɔ̀ɔŋèəv** **lɯɯ** ròmpɔ̀ɔŋ
鶏 鳴く 聞こえる 響く
＜鶏が鳴いて大きく響いて聞こえた＞ (RPH)

(51) rɔ̀ntɛ̀əh **baɲ** **lɯɯ** kdaŋ
雷 撃つ 聞こえる ドシン
＜雷がドシンと聞こえる（ように）＞ (JSR)

４．３．［V2］の位置に現れる動詞

本節では、/lɯɯ/が［V1］の位置にある文で、［V2］の位置に現れる動詞について述べる。

2章で紹介した、Haiman（2011, 2019）の例と同じ動詞/lɯɯ/＜聞こえる＞と/dəl/＜至る＞の組み合わせは、本調査でも現れた。しかし、以下の例（52）では、/lɯɯ/＜聞こえる＞の前にさらに別の動詞/lèc/＜漏れる＞がある。また、例（53）では、さらに/mɔ̀ɔk/＜来る＞と/dəl/＜至る＞も介在している。従って、このような例の/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V1］の位置にあって、動作の試行を表す、という（Haiman 2011:275）の説明は考えにくい。

(52) lèc **lɯɯ** **dəl** mɯt ren
漏れる 聞こえる 至る PSN
＜（病気の彼女の秘密が）レンに聞こえてしまう（のをおそれた）＞ (RPH)

(53) baan **lɔ̀ən** **lɯɯ** mɔ̀ɔk dəl ptɛ̀əh kɲom
得る 音をたてる 聞こえる 来る 至る 家 1SG
＜（南の首都防衛最終戦線の砲撃音は）私の家まで届いた＞ (NRK)

/khɔ̀əŋ/＜見える＞について3章で述べたことと同じく、/lɯɯ/＜聞こえる＞についても、下記の例（54-55）のように、位置的には/lɯɯ/＜聞こえる＞の後に他の動詞が続く用例は数多く見つかった。しかし、いずれの例でも、/lɯɯ/＜聞こえる＞とそれに続く動詞の意味的な関係を見ると、動作とその結果を表しているとは考えられなかった。従って、このような/lɯɯ/＜聞こえる＞に後続する動詞は、聞こえた内容を表しているもので、前節で述べた補文節の標識/thaa/がない形だと考えられる。

(54) pèel **lɯɯ** mcah ptɛ̀əh **pòol**
時 聞こえる 主人 家 述べる
＜家の主人が話すのを聞いた時（決心した）＞ (RPH)

(55) paa mɯn dael **lɯɯ** ʔaeŋ **criəŋ** səh
父 NEG EXP 聞こえる 2SG 歌う PTCL
＜お父さんはおまえが歌っているのを聞いたことがない＞ (RPH)

以上、本章では、/lɯɯ/＜聞こえる＞の出現環境と用法を整理した。/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V2］の位置にある連続では、動作の主体は［V1］と［V2］で共有される場合とされない場合がある。また、一見/lɯɯ/＜聞こえる＞が［V1］の位置にあるように見える用例は、方向を表わす動詞が後続していたり標識が出現しない補文節であり、/lɯɯ/＜聞こえる＞が意図を表わしているとは考えられない。

5．おわりに

以上、本稿ではクメール語の結果を表す動詞の中から、視覚と聴覚にかかわる2語、/khəəŋ/＜見える＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞を対象とし、その出現環境と用法を整理した。

調査にあたっては、まず、先行研究で挙げられている、結果を表す動詞の種類とその対となる動詞を対照した。また、同じ動詞が連続中の出現位置によって異なる役割を果たすという先行研究の主張について、その根拠となる例文について検討した。次に、文学作品を主とする資料中の用例から、この2語の動詞/khəəŋ/＜見える＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞がどのように用いられているかを調査した。

調査の結果、この2語が［V2］の位置にある連続では、/khəəŋ/＜見える＞については、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されるが、/lɯɯ/＜聞こえる＞については共有されない例が多いことがわかった。また、/lɯɯ/＜聞こえる＞の用例では、動作主体を共有しない場合、/lɯɯ/＜聞こえる＞の後に、どのように聞こえているかを表す何らかの修飾語句を付けたり/lɯɯ/＜聞こえる＞を重複させるか、もしくは否定辞を用いて聞こえていないことを表す必要があった。さらに、動詞は必ずしも2語だけで連続するわけではないため、先行研究の例文にあった動詞の組み合わせも用例を見るとその前後にさらに別の動詞が位置しており、出現環境によって/lɯɯ/＜聞こえる＞が結果ではなく動作の試行を表すというHaiman（2011:275）の説明は確認できなかった。

注

1　本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C）「クメール語の複数動詞文における動詞の下位分類に関する記述的研究」（17K02715研究代表者：上田広美）の研究成果である。

2　類型論的には孤立語に分類され、語形変化はなく、述語である動詞句を中心とする語順によって、文の意味が決定される。品詞分類のための形態的特徴は存在しない。基本語順は［主語＋述語＋補語］であるが、言わなくてもわかることは言わないため、主語と補語は必ず現れるとは限らない。日本語と同じく、述語以外の要素を文頭に置き、主題とすることができる。

3　クメール語の動詞は、/sɔmlap/＜殺す＞のように対象に直接影響や変化を与える意味を持った動詞であっても、以下の例文のように、その結果を否定することができる。しかし、/caol/＜投げる＞など一部の動詞については、結果を否定できない。

sɔmlap	mɯn	slap		
殺す	NEG	死ぬ	＜殺したが死ななかった＞	(CAM)

4　上田・岡田（2017）では、以下の手順により、動詞句の表す2つの事象の意味関係を分類した。

①　文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることが可能な連続は、[V1]と[V2]の表す事象の並列を表す。

②　[V2]を否定できる連続は、[V2]が[V1]の結果を表す。

③　[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できる連続[V1(+N)+V2]は、[V2]が[V1]の目的を表す。

④　[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できない連続[V1+V2(+N)]は、

ア　動作の対象を共有する場合には、[V2]が[V1]の目的を表す。

イ　動作の対象を共有しない場合には、[V2]が[V1]の様態を表す。[V1]と[V2]の間に時間的な前後関係はない。

　また、連続する動詞句は並列の場合をのぞき修飾関係にあり、語彙的な組み合わせや文脈上の制限によって、修飾関係が成り立たないと考えられる場合は連続できないことを述べた。

5　以下、本稿の表記は音韻表記で、坂本（1988）に従う。略語は以下の通り。接続詞 CONJ，コピュラ COP，経験 EXP，1人称 1，否定 NEG，名詞化 NOM，人名 PSN，複数 PL，禁止 PROH，文末詞 PTCL，疑問マーカー Q，引用 QUOT，関係詞 REL，2人称 2，単数 SG，3人称 3。先行研究中の例文も、本稿に掲載するにあたり表記と番号を統一した。また邦文でない文献の用例は逐語訳と全文訳の和文を付加した。

6　クメール語は時制を表す特別な形式がなく、時を表す語や文脈から判断される。

7　紙面の制約から例文は全文を掲載しなかったが、必要に応じて全文訳中の（ ）に

文脈を補った。

8　/sɔmraan/＜横になる＞は、他に/deek/＜寝る＞、/keeŋ/＜横になる＞という動詞も同じ意味で用い、文体によって使い分ける。

9　次の例のように、/deek/＜寝る＞の［V2］として、別の動詞が現れることがあるが、この［V2］は否定することができない。横になった結果、病気になったり、死んだりするのではなく、どのような状態で横になっているかを示す修飾語であると考えられる。

deek　chɯɯ　tɔ̀h　　deek　ròot　　deek　tŋɔɔ　　deek　slap　kdəj
寝る　病む　たとえ　寝る　うめく　寝る　うめく　寝る　死ぬ　PTCL
＜横たわる病人たちについては、うめこうが、死のうが（医者は全くかまわなかった）＞　(NRK)

10　クメール語に言語調査が可能なコーパスは存在しないため、本稿の調査では、過去50年間に発表された文学作品8作品について、以下の試算をした。

sdap	lɯɯ	mə̀əl	khə̀əŋ	資料	年
32	111	154	148	PSP	1960
8	10	68	68	SPT	1965
25	57	67	119	MDB	1988
41	66	92	110	RPH	1988
6	17	16	37	CKK	200?
9	7	26	45	KPM	2000
2	9	24	28	PNP	2003
5	14	24	31	KTH	2007

11　もしくは、文体によって/ʔət/、/pòm/が用いられる。

12　クメール語の否定辞は、否定する語の直前に付加する。名詞の否定は、/mɯn/を直接前置できず、/mɛ̀ɛn/＜本当に＞を必要とする。

13　例文中で問題となる動詞を太字で示す。文学作品からの例文は、以下の略号を各例文末尾に記す。CKK: Sym,Chanya [200?（出版年記載なし）] *Chak kamplaeng kannha sobha*., JSR: Lek, Rary 1967 *Jati satri*., KPM: Mav,Samnang 2000 *Kamrang pka mlih*., KTH: Pal,Vannarirak 2007 *Ksae tuk ho*., MDB: Di, Ci Huot 1988 *Mekh Pat Duon Cand*., NKS: Pal, Vannarirak 2016 *Nau kbae seckdi slap*., NRK: Om, Sambatt. 1999 Muoj ban bi ray huksip pram muoy thnai knun narok., PNP: Sym,Chanya 2003 *Pkay nav tae ploe*., PSP: Nu, Hac 1960 *Pka srapon*., SPT: Rim, Kin 1965 *Sophaat*., RPH: Pal, Vannarirak 1988 *Ronoc phot haei*.

資料の一部（CKK, KPM, KTH, PNP）は、科学研究費補助金（基盤研究C）「現代カンボジア文学の翻訳と研究」（研究代表者：岡田知子）により入手したものである。

ウェブサイトからは以下の例を掲載した。CAM：Cam NEWS , http://www.camnews.or

g/2014/01/10/%E1%9E%9B%E1%9F%84%E1%9E%80-%E1%9E%9F%E1%9E%98-%E1%9E%9A%E1%9E%84%E1%9F%92%E1%9E%9F%E1%9F%8A%E1%9E%B8%E2%80%8B%E1%9F%96-%E1%9E%98%E1%9E%B6%E1%9E%93%E2%80%8B%E1%9E%8F%E1%9F%82%E2%80%8B%E1%9E%85/ (最終閲覧日2019年11月29日）

14 本稿の調査のために、カンボジア王立プノンペン大学のバン・ソバタナ先生にご協力いただいた。例文中で出典の記載がないものはすべて先生から直接得た例である。本調査へのご協力に深く感謝する。

15 果物などをもぐときに、数が多すぎて、もいでも減らない状況で用いる。

16 本稿では動詞が連続する例のみを調査したが、接続詞/tàəp/を介在させて複文にする例もある。

prɔ̀h kɲom **chaek** baaloo rɔ̀ɔbɔh mɯt tàəp **khàəɲ** nèəliʔkaa nih
～から 1SG 調べる 荷物 の 友 CONJ 見える 時計 これ
＜（あなたが気絶していた間に）荷物を調べたら、この時計を見つけた＞ (RPH)

17 ［V1］の位置には、現実に見ているのではない、/jɔ̀l sɔp/＜夢を見る＞という動詞句も現れる。

jɔ̀l sɔp khàəɲ ruup nèəŋ ...
夢見る 見える 姿 PSN
＜花から生まれた天女の姿を夢でみる人もいるだろう＞ (PSP)

18 結果を表す連続では、［V2］を否定するが、［V1］の前に可能を表す語/ʔaac/がある場合には、否定辞は/ʔaac/の前に位置する。

mɯn ʔaac **màəl** **khàəɲ** pii cɔmŋaaj
NEG できる 見る 見える から 遠さ
＜（兵士の死体を見ようと集まったが）遠くからでは見えなかった＞ (NRK)

19 以下の例でも、形としては、動詞/tvàə/、/khàəɲ/、/lɯɯ/が動作の主体を共有しており、［V2］の位置にある/khàəɲ/と/lɯɯ/が否定されている。しかし、/tvàə/と/khàəɲ/や/lɯɯ/の間には、動作とその結果を表す意味的な関係が考えられない。

tvàə mɯn **khàəɲ** mɯn lɯɯ sɔmleeŋ dɔŋhaəm
作る NEG 見える NEG 聞こえる 声 息
＜みんな顔を伏せ瀕死の彼女が救いを求める）声を見たり聞いたりしないようにした＞ (RPH)

20 動詞句が連続する際に、[V1]と[V2]が動作の主体を共有せず、[V1]の動作の対象を表す補語が[V2]の動作の主体を表す連続については、Bisang（1991）、Haiman（2011）、Self（2014）でそれぞれその存在が指摘されている。

21 ただし、［V1］の位置に同じく結果を表す/baan/が確実性を示す助動詞的用法として現れた場合はのぞいた。

参考文献

Bisang, Walter. (1991) “Verb serialization, grammaticalization and attractor positions in Chinese, Hmong, Vietnamese, Thai and Khmer”, Partizipation: das sprachliche Erfassen von Sachverhalten; pp. 509-562, edited by Hansjakob Seiler / Waldfried Premper, Gunter Narr Verlag Tübingen.

(2014) “Modern Khmer”, *The Handbook of Austroasiatic languages (Grammars and Sketches of the World’s Languages: Mainland and Insular South East Asia)*; pp. 677 - 716, edited by Mathias Jenny / Paul Sidwell, Brill Academic Pub; Lam.

Haiman, John. (2011) *Cambodian Khmer*. London: John Benjamins.

(2019) “Khmer”, *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area (Trends in Linguistics. Studies and Monographs)*; pp. 320 - 383 , edited by Alice Vittrant/ Justin Watkins, Mouton De Gruyter.

Huffman, Franklin Eugene. (1967) *An outline of cambodian grammer*. Ann Arbor:University Microfilms.

Jacob, Judith M. (1968) *Introduction to cambodian*. London:Oxford University Press.

Khin, Sok (1999) *La grammaire du khmer moderne*. Paris: Éditions You-Feng.

坂本恭章（1988）「クメール語」『言語学大辞典第1巻世界言語編（上）』pp.1479-1505、亀井孝、河野六郎、千野栄一編　三省堂.

SELF, Stephen. (2014) “Another look at serial verb constructions in Khmer”. Mon-Khmer Studies 43.1; pp.84-102 (ICAAL5 special issue).

上田広美・岡田知子（2017）「クメール語の動詞句の連続について」pp.36-71『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』東南アジア諸言語研究会　慶應義塾大学言語文化研究所.